

シンポジウム
研究班発表

中国大陸における日本人類学の影響力

劉正愛

皆さん、こんにちは。まず、こんにち、こちらにお招きいただきまして、誠に感謝しております。改めて高橋先生、周先生、及び愛知大学の皆様に感謝の意を申し上げたいと思います。今日のテーマは中国における日本人類学の影響なんです、一応パワーポイントは中国語で出ていますので、それを見ながら、話を進めていきたいと思っております。結構情報量が多いものですから、ところどころ飛ばしながら、話を進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いします。学問の影響というのは、例えば日本人類学者の場合は、日本語で書かれますので、それが中国でどう読まれるかっていうのが大事だと思うんですね。もちろん中国の人類学界の中にも、日本語がわかる人がいると思っておりますが、ただその学問の影響と申しますと、やっぱり幅が広がりますので、その作品がいかにか、どういう程度で中国語に翻訳されているのか、それが中国の学界で、どのような影響を与えているのかってことですので、その作品の翻訳状況を交えながら、あるいは、主としてその翻訳状況を紹介しながら、その影響力についてお話し進めたいと思っております。

日本人類学は戦前からかなりたくさん業績を積み上げてきています。一応、時間上、戦前の話は飛ばしまして、主に1980年代以降を中心に紹介したいと思います。なぜ1980年かといいますと、1980年以前は、人類学、あるいは民族学という学問は中国では、文化大革命から、いろんな政治運動の関係で、ほとん

どもうない、破棄された状態でした。それが回復されたのが、1980年代。ですからそれ以降ということになります。もちろん戦前の満鉄調査についてもふれますが、満鉄調査が中国の学会に影響を与えるのは、80年代以降のことでしたので、それもこの考察の範囲に入れました。ここで言う日本人類学っていうのは、日本を根拠とする人類学というふうに定義したいと思います。例えば、私のような修士や博士課程を日本で学び、博士号、修士号を日本で取られた外国人、あるいは周星先生のように中国人でありながら、日本の大学に勤めていらっしゃる方。日本で研究を進めていらっしゃるという、そういう方も含めまして、一応日本を根拠とする人類学というふうに定義します。今日、ご紹介する内容ですが、主に少数民族研究、その中でも、西南文化、西南研究で、稲作文化、あるいは照葉樹林文化などが含まれます。それから生態文明史観、これは民博の梅棹先生が提出した理論ですが、それについて簡単に紹介して、そのあとに満鉄調査の中で、特に華北農村慣行調査について少しふれます。それから日本人類学の中で、一番大きな内容を占める漢人社会研究、その中でも例えば村落共同体研究、それから宗族研究、民俗宗教、客家研究などが含まれます。その他の人類学の分野ですと、例えば生態人類学や、景観人類学なども簡単に紹介していきたいと思っております。

戦後日本人類学者による西南少数民族研究は、1980年代以降からになります。それまで

は日本人留学生も含めまして、外国の学者が中国でフィールドワークをすることは、ほとんど不可能でした。当時例えば白鳥芳郎は、タイでヤオ族の調査を行いました。1979年以降、中国に入ることができるようになってから、ようやく中国のヤオ族について研究を進めていくわけですが、そこでタイで発見した『傜人文書』という、非常に有名な文書があります。そのあと中国の学者に知られ、その啓発を受けて、中国の学者もヤオ族の『傜人文書』を研究するようになりました。白鳥芳郎と竹村卓二の著作も中国語に翻訳されました。中国でこの二冊の本は、ヤウ族研究者の必読書になっております。白鳥と竹村は、わりと年配の研究者だったのですが、1980年代以降、若い学者らが次々と中国にフィールドワークに出かけ、少数民族について調査を行いました。その中でも特に、塚田誠之先生、今年民博を退職なさってるかたですが、広西省の壮族の歴史文化を研究してきました。塚田先生の漢訳作品はかなり多いものです。論文19編が中国語に翻訳されております。

ほかにこのPPTに書かれている方々、時間の関係上いちいち申し上げませんが、ほとんどの西南少数民族を網羅するかたちで、日本研究者が研究を進めてきているわけです。特に松本光太郎先生は、残念ながらもう亡くなっておりますが、漢族のサブグループの平話人について初めての人類学的な考察を行った学者として、中国では評価されています。それから民博の横山廣子先生、白族の研究をなさっておりますが、中国ではかなり影響力を持っている学者として知られています。中根千枝先生が中国に行くたびに中根先生を御伴して北京大学を訪れたり、シンポジウムに参加したりして活躍していた方です。

それから北方民族研究なんですけど、例えば、江上波夫の「騎馬王朝論」がありますね。ただ、「騎馬王朝論」は、北方民族研究の分野

ではかなり有名ですが、人類学界ではあまり知られておりません。漢訳作品は9編あるわけですので、一般の読者には、よく読まれている状態です。ほかに例えばモンゴル族の研究をしている小長谷先生はオーラルヒストリーとか、モンゴルの食事文化研究などに携わっていますが、ある程度、モンゴル研究の中では、影響力を持っています。ほかに例えば畑中幸子は、北方少数民族文化について研究する際に、「文化複合論」という概念を提出していますが、中国の学者にはあまり知られておりません。戦後、北方民族の調査といえどもう一つ満族調査があります。私自身の博士論文も満州族について書かれたものですが、『民族生成の歴史人類学』という本を出しています。満族のエスニシティについて書かれたものです。日中国際共同研究による満族調査は、第一書房で『満族の家族と社会』という本でまとめられていますが、中国語に翻訳されていないぶん、ほとんど中国の北方民族研究の分野では知られておりません。あとはムスリム研究や回族研究などが挙げられますが、どちらかといいますと、回族研究やムスリム研究は、日本国内だけで消費されているようで、中国の学者との交流はほとんどないと言ってもいいかもしれません。

中国の学界に影響を与えたのはもう一つあります。「照葉樹林文化論」です。これは1979年の末から1980年代にかけて、日本でも文化人類学界では非常に人気のあった理論です。日本文化の源は雲南にあり、中国にあるというものです。中国の東部から雲南、アッサム地帯を経て、日本に渡ったというような説ですが、これも中国ではかなり受けまして、日本の論文を中国語に訳した、尹紹亭は、のちほどこの「照葉樹林文化論」の影響を受けて、生態人類学に移るわけです。日本人のルーツ探しのことを紹介した文章が、当時1980年代から、1990年代の頭ぐらいで、かなり中国で

話題になっておりました。学術的な対話も行われまして、中国の学者による論文や評論もよくみられました。もちろんこの照葉樹林文化については賛否両論でして、賛成の声も反対の声もありますが、ご興味のある方は、私の論文を読んでいただきたいと思います。

1990年代以降は、ポストモダンニズムの影響もあってか、「照葉樹林文化論」はますます疑われるようになりまして、日本の学界全体において、中国西南地区に対する研究の方向転換が行われました。長谷川清先生、瀬川昌久先生、塚田誠之先生とかも、従来のそういう研究パラダイムからすこし離れまして、歴史学から民族の表象の中の政治性について研究するようになります。とはいえ、この『照葉樹林文化』という本は、去年貴州大学で再出版されるなど、あいかわらずその熱は完全に冷めたわけではありません。

次に梅棹先生の『文明生態史観』なんですが、日本では1957年に発表され、10年か20年ぐらい、日本の学界で話題になった作品です。中国では1980年に翻訳されるわけですが、その影響というのは、人類学界というよりも、主に政治学や歴史学、それから国際関係学、日本研究などの分野において大きかったかもしれません。不思議なことに、中国の人類学界ではほとんど知られていませんでした。

ところが近年例えば、北京大学の人類学者である王銘銘先生は、文明論の研究に興味を注がれているわけですが、梅棹先生の研究にも注目するようになり、梅棹先生の文明生態史観は少しではありますが、次第に中国のほかの人類学者にも知られるようになっております。

次は、中根千枝先生の研究について触れます。皆さんご存じかもしれませんが、中根千枝先生は『タテ社会の人間関係』で、有名な先生ですが、中根千枝先生の作品が初めて中国で紹介されるのは1982年のことです。訳書

は恐らく四つのバージョンがあると思います。雲南、それからあと台湾の出版社などですね。中根先生の訳書はぜんぶで7部あります。翻訳された論文は17編ぐらいです。中根千枝先生は社会人類学者ですが、中国の学界ではむしろ日本研究の領域でその名が知られておりました。『タテ社会の人間関係』は、中国人が日本社会を理解する一つの入門書として読まれるようになっております。もちろん日本研究以外にも、最近例えばフィールドワーク論、日本文化研究、インド研究などもあります。中根千枝先生は、インド研究やチベット研究に長けていらっしゃると思いますので、そういった面でも少しずつ影響は拡大しつつあります。中国では、日本人類学者の中で引用率の最も高いのが中根先生かもしれませんね。中国の有名な社会人類学者であり、社会学者でもある費孝通先生との個人的な友を交えながら、中根千枝先生と中国学界との学術交は、かなり頻繁に行われました。東京や、北京などでシンポジウムを行ったり、アジア社会の研究に関するさまざまな議論が行われ、中国の学界に大きな影響を及ぼしてきました。

次は漢人社会研究ですが、先ほど申し上げましたように、その中でも戦前華北で行われた中国農村慣行調査が、中国学術的に影響を及ぼすのは、1980年代以降となります。ここに挙げる3人のアメリカの学者の役割が大きいものです。黄宗智、杜贊奇 (Prasenjit Duara)、Ramon Hyers、この3人の学者は満鉄の資料を利用して、著作を書くわけなんですけれども、この三人の著作は中国では大変引用率も高く、影響力のあるものです。これらの研究を通して、中国の学者は初めて満鉄調査の利用価値を知るわけです。1998年、中国社会科学院で、百村調査という大きなプロジェクトを立てるわけですが、その主題や調査内容の設計などにも、日本人社会学者の影響があちこちに見られます。たとえば、そのなかに共

同体理論というのがありますが、かなり影響を受けてるなという感じがします。

1980年代以降、日本学者による満鉄調査の追跡調査も盛んに行われるようになります。例えば、人類学者の中生勝美先生は、追跡調査を行って、1990年代に、『中国村落の権力構造と社会変化』という本を出すわけですが、中国語に翻訳されていないにもかかわらず、引用率が高く、日本語が読めない学者の本の中にも参考文献としてあげられていることは、非常に面白いことです。あと内田雅生先生の『二十世紀華北の社会経済研究』も中国で出版されてますね。それから佐々木衛先生の追跡調査、中日の学者による共同研究調査、中国の学者による追跡調査なども挙げられますが、詳しいことは時間の関係上省略いたします。中国の人類学界では、日本の人類学は理論がなく、細かいデータしかないというような評価がかなり多いのですが、実はそうではなく、例えば村落共同体論やら、文明生態史観、それから祭祀圏理論とか、かなり日本人類学者の理論的な貢献は大きいものと思います。ところが言語の問題で、これらの作品が中国語に翻訳されていないために、多くの学者に知られていないというのが現状です。それから例えば、姻親研究とか、さまざまな領域で日本人類学の影響が見られます。

次に渡邊欣雄先生の民俗宗教、それから知識人類学の影響について簡単に紹介します。こちらにいらっしゃる周星先生が渡邊先生の本を中国語に翻訳するわけですが、タイトルに民俗宗教という言葉を入れています。つまり、原文は『漢民族の宗教』だったのですが、「民俗」という言葉をいれることによって、中国の文脈に合った概念を提出することになるんですね。その影響力はかなり強いものです。ちなみに渡邊先生の民俗知識論を紹介した周星先生の論文は、中国ではかなり引用率の高いものとなっております。渡邊先生の民

俗知識論や、風水研究は中国でも日本でも有名です。このほかに田仲一成先生の祭祀演劇研究もすでに7冊ぐらい本が中国で翻訳されています。

それから特別に言いたいのは、最近、若い人類学者らが中国に留学して、中国語を勉強し、中国語で論文を書いて本を出しているということです。これは非常に評価すべき現象であると思います。現地で調査して、研究対象にわかるような言葉で、研究成果を発表するのが、いかに学術の影響力を高めるのに大事なのかというのを知ってみたいです。時間はあと1分しかないので、飛ばします。最後になりますが、学術研究や学術交流の大事さです。逆に中国研究が日本にどの程度紹介されているのかと考えますと、全然アンバランスな状態なんですね。それをいかにこれから変えていくべきなのかっていうのも考えなければなりません。それからアジアの学術共同体を作り、日中韓3国の文化人類学者の間の交流も深めていく必要があるかなと思っています。時間の関係で、一応ここまで簡単に紹介をまとめました。ご清聴ありがとうございました。